毎月11日掲載

防災・減災のページ

むすび塾

第67回 東京新聞と共催　@東京・墨田 曳舟

園児誘導 初の合同訓練

首都直下地震の火災避難

河北新報社は5月27日、木造住宅密集地域の災害対策をテーマにした防災・減災ワークショップ「むすび塾」を東京都墨田区曳舟地区で開いた。東京新聞との共催で通算67回目。首都直下地震の発生に伴う火災を想定し、地元の町内会（町会）と保育所が初めて合同の避難訓練に臨み、地域で助け合って身を守る大切さを確認した。

訓練は、東京湾北部を震源とする最大震度6強の地震で火災が起き、折からの強風にあおられて延焼の危険性が高まっているとの想定。私立「杉の子学園保育所」の4～6歳児13人と引率の保育士、曳舟中町会の住民ら計約30人が参加し、地域の一時集合場所から指定避難場所までの約1・5キロを歩いた。

住民らはまず、一時集合場所の「ふじのき公園」に集結。安否確認などをした後、近くの保育所に向かい、園児たちを公園に誘導した。途中、最短コースの狭い路地が建物の倒壊で通れない事態を見込み、引き返して別ルートで避難した。

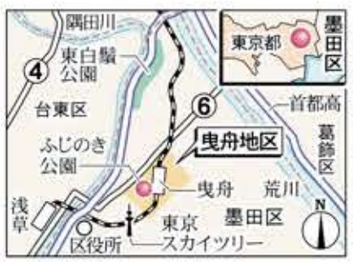
公園に着くと、区職員が「火災が拡大したため避難指示が発令された。速やかに避難を」とアナウンス。参加者は、指定避難場所の東白鬚公園を目指して2次避難を始めた。

住民らは、防災頭巾をかぶった園児の手を引いてサポート。道路沿いの至る所に消火器が設置されていることを確かめながら歩き、中間地点にある指定避難所の第一寺島小では備蓄倉庫を見学した。水分補給などしつつ、東白鬚公園には約1時間半かけて到着した。

道が狭いため車や自転車が通るたびに立ち止まる場面もあり、「子どもの目線に立つと自転車も危険」と誘導の難しさを指摘する声が上がった。曳舟中町会会長の須藤正さん(69)は「初めて一緒に避難訓練した経験を生かし、園児や若いお母さん方と地域防災を考えていきたい」と意欲を語った。

住民と一緒に避難場所に向かう園児たち。道幅の狭い住宅密集地域も通った

道沿いの至る所にある消火器



東京・下町の墨田区曳舟地区は戦災を逃れた区北部に位置し、古くからの木造住宅密集地が広がる。地区人口は約2万3000人。

下町の木造密集地域

狭い路地 延焼懸念

消防車が入れない狭い路地も多く、火災が起きれば延焼の危険は高い。首都直下地震の被害想定では、区の死者665人のうち200人を火災犠牲が占める。

区は「燃えないまちづくり」を推進し、住宅街の各所に消火器を配備。各町内会（町会）は消火隊を結成し、災害時の初期消火を担えるように訓練している。

墨田区は荒川と隅田川に挟まれて海抜が低く、水害への備えも欠かせない。

■むすび塾に参加して　東京・墨田 曳舟

【参加して】震災語り部の皆さんが体験したような悲劇を繰り返してはいけないと改めて思った。高齢者の災害対策は検討してきたが、園児は抜けていた。大事なのは「訓練は実践のごとく、実践は訓練のごとく」。今後は地元事業所とも一緒に訓練するなどつながりを密にしたい＝曳舟中町会会長・須藤正さん(69)

【参加して】避難訓練で園児の手を引いて歩いたが、子どもたちはまっすぐ歩かずに左右にそれる。大人だけの訓練では気付かなかった点で、勉強になった。訓練をするとしないのとでは大きな違い。首都直下地震に備え、町会の「消火隊」と園との合同訓練を考えてもいい＝曳舟中町会副会長・溝井平さん(79)

【参加して】地域の方々と一緒に訓練ができて大変心強く思った。今後、さらなる協力関係を築く上でのスタート地点に立てたような気がする。ただ、訓練を重ねていくには日程調整などの課題も多い。関係者と知恵を出し合いながら備えを進めたい＝杉の子学園保育所副園長・石塚千恵子さん(55)

【災害に備えて】災害時、墨田区社協は災害ボランティアセンターの設置を担うが、目や耳が不自由な利用者を速やかに避難させることが第一だ。訓練をしないと分からないことがあると知ったので、外部と連携した訓練を検討し、避難体制づくりを進めたい＝墨田区社会福祉協議会主任・堀かおるさん(45)

【参加して】活動拠点に防災用品を集め、段ボールで囲いを作って避難所体験をするなどしている。大災害の教訓を生かして何ができるかを考えたい。今回の「むすび塾」では地域の多様な立場の人が集まり、プラットホーム的な場ができて良かった＝墨田区ボランティアサークル連絡会会長・小川昭さん(72)

【災害に備えて】「ハンマーズ」は墨田区の建設労働者2800人でつくる労組支部が結成した自主防災組織。建設のプロだからこそできる倒壊家屋からの救出などを担う。「事業所も町会の一員」との認識で今後も防災の担い手を増やしたい＝東京土建墨田支部ハンマーズ副キャプテン・村山紀親さん(47)

【災害に備えて】学生ボランティアとしてまちづくりに関わっている。想定すべき災害が多い地域だが、地域の良さを防災に生かす工夫の余地はあると感じている。若者の視点を生かし、地域防災力を向上させるアイデアを提供したい＝東向二四地区まちづくりを考える会会員・石井亮介さん(24)

【災害に備えて】災害時に区の情報を迅速に伝えられるよう準備しているが、大事なのは住民の意識。避難計画を基にしつつも臨機応変に行動できる意識を広めたい。地域の消防隊を頼りにしているが、企業の力も重要。住民と連携した防災計画を作るよう働き掛けたい＝墨田区防災課防災係長・山岸幹郎さん(56)

■専門家から

命守る逃げ先 確保重要

東大生産技術研究所准教授（地域防災）

加藤　孝明さん(50)

阪神・淡路大震災の発生時、風は弱く、延焼速度も時速40～50メートル程度と遅かった。風が強ければ、もっと燃え広がった可能性がある。

地震火災のスピードは津波ほど速くはないが、逃げた先々で火に遭遇する危険性がある。重要なのは逃げ先の確保。今回立ち寄った小学校のグラウンドのような所では、火に囲まれて熱くていられないだろう。最終的には、東白鬚公園のような大きなオープンスペースに出ないと命は守れない。

火災は初期段階なら消せるが、建物が火に包まれるようになったら難しい。逃げる判断も大事だ。

避難や消火活動をするためには被災した建物から脱出できていることが大前提。建物の耐震化なども地域全体で徹底してほしい。

横の連携 話し合い必要

東洋英和女学院大准教授（防災教育）

桜井　愛子さん(47)

墨田区曳舟地区を歩き、50メートル間隔で消火器が設置してあるのを見て防災意識の高さを感じた。ただ、災害が起きれば、地域の生活者同士の協力が欠かせない。今はそれぞれ訓練をしているが、横の連携を調整する人がいない。例えば近隣に住む学生を媒介に、地域の祭りなどを通じて交流を持つのはどうか。

災害時の避難場所や情報を基にどう行動するかは、日頃から住民同士でよく話し合う必要がある。大事なのは、迷うことなく行動できるよう自分たちが納得する形を追求すること。一つずつ課題をつぶしていく地道な話し合いは、遠回りのようだが最も近道だ。

避難訓練の参加者を増やし、防災に関わる人の裾野を広げてほしい。